

表紙画像

《夢窓疎石像》(部分)

河田小龍筆 滴水宜牧賛

吸江寺蔵

会 期 令和元年(二〇一九)十月四日(金)～十二月二日(日)

主 催 高知県立歴史民俗資料館(公益財団法人 高知県文化財団)

後 援 高知県教育委員会、高知新聞社、朝日新聞高知総局、毎日

新聞高知支局、読売新聞高知支局、産経新聞社、日本経済

新聞社高知支局、共同通信社高知支局、時事通信社高知支局、

NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、

KSSさんさんテレビ、KCB高知ケーブルテレビ、エフ

エム高知、高知シテイFM放送

★ 2019年度第69回高知県芸術祭共催行事

▲ 芸術文化振興基金助成事業

びあじやつ

五台山の麓ふもとに位置する吸江寺ぎゅうこうじは、鎌倉時代末から南北朝時代にかけて天皇や足利家からの帰依きえを受け活動した臨済宗の高僧、夢窓疎石むそうそせきが文保二年（二三一八）に土佐に下り、吸江庵を結んだことに始まります。その後、「五山文学の双璧」と称される土佐出身の義堂周信ぎどうしゅうしん、絶海中津ぜっかいちゅうしんらがそのあとを継ぎ、土佐の守護であった細川氏の庇護の下、長宗我部氏ちようそがべが寺奉行を勤めました。江戸時代には、土佐藩初代藩主・山内一豊かつとよの子・湘南しやうなんが住職となり、吸江庵から吸江寺に改め隆盛します。明治時代初めに廃仏毀釈はいぶつきしやくによって一旦は廃寺となりますが、本山妙心寺から特命をうけ土佐に入った少林踏雲しやうりんとううんの類まれなる努力によって再興を果たし、今日まで法灯を守っています。

また、江戸時代後期から明治時代にかけて浦戸湾に開ける吸江の地は画題として好まれ、多くの絵師によって「吸江図」が描かれました。吸江寺は土佐随一の名刹であるだけでなく、風光明媚な景勝地として土佐の人々に愛されましたのです。

本展は、昨年吸江寺が開創七〇〇年を迎えたことを記念し、吸江寺の歴史を大観するとともに知られざる寺宝の数々を一堂に紹介します。

最後になりましたが、本展開催にあたり、貴重な文化財をご出品いただきましたご所蔵者各位、ご協力を賜りました関係各位に心よりお礼申し上げます。

令和元年十月

高知県立歴史民俗資料館

凡例

○本書は、高知県立歴史民俗資料館において、令和元年（二〇一九）十月四日（金）から十二月一日（日）まで開催する企画展「開創七〇〇年記念 吸江寺」の図録である。

○作品番号は展覧会会場での展示番号と一致するが、展示の順序とは必ずしも一致しない。また、展示替えなどの都合により、本書に掲載されていても、展示されていない作品がある。

○作品解説は、作品番号、作品名称、員数、作者・賛者等、材質技法、法量（センチメートル）、時代、所蔵者、指定名称の順とした。

○作品解説は、No 1～5、10、11、28～38、40～42を那須望、No 6、12、17、21～27、39を石畑匡基、No 7～9を岡本桂典、No 13を曾我満子、No 16、18～20を西山浩生（以上、高知県立歴史民俗資料館）、No 14、15を野本亮（資料調査員）が執筆した。

○一章及び三章の章解説は那須望、二章の章解説は西山浩生が執筆した。

○本書の時代区分は左記のとおりである。

奈良時代（七一〇～七九四）、平安時代（七九四～一一九二）、

鎌倉時代（一一九二～一三三三）、南北朝時代（一三三三～一三九二）、

室町時代（一三九二～一五七三）、安土桃山時代（一五七三～一六〇三）、

江戸時代（一六〇三～一八六八）、明治時代（一八六八～一九二二）、

大正時代（一九二二～一九二六）、昭和時代（一九二六～一九八九）

平成時代（一九八九～二〇一九）

○掲載画像は、中島健蔵（中島写真事務所）、金井杜道（金井杜道事務所）、竹村豊（タケムラスタジオ）が撮影した。また、高知県立高知城歴史博物館、創造広場「アクトランド」から画像の提供を受けた。

目次

禅院吸江寺の中世 芳澤 元

6

図版

第一章 吸江庵のはじまり

17

第二章 吸江庵の隆盛と時の権力者たち

33

【コラム】 室町・戦国期における吸江庵領の変遷 楠瀬 慶太

48

【コラム】 吸江寺文書と長宗我部氏 野本 亮

50

第三章 廃寺からの復興、そして現在へ

53

資料

作品解説

77

参考文献

90

出品目録

92